

会員の広場



あの日あの時

濱田 義文（東京）

あの日あの時、新幹線に乗っていた。郡山駅に間もなく到着というとき、車体が斜めになり、トンネルに吸い込まれるようにして急停車した。「宮城沖で地震」と車内放送があった。月がのぼる頃、粉雪が淡く舞い散るなか、高架の鉄道を隊列を組んで歩き出す。新白河

の駅舎は壊れていた。白河中学校の体育館で一夜を明かす。朝刊が配られた。東日本大震災の大津波、惨情をはじめて知った。昼にはバスで大宮駅に向け帰途につく。JRの職員が一列になり、頭を下げ見送ってくれた。

本年三月一七日、東北新幹線で地震による脱線事故があった。乗員乗客ともに無事だった。時速二百キロ超の列車が地震を感じて、一連の対策メカニズムが機能し、緊急停車した。転覆、大破することなく大惨事を免れた。二〇一一年七月、中国高速鉄道で列車衝突・脱線事故があった。死者四〇名とされている。事故車輛は解体され、地中に埋め立てられた。事故発生二日後、運行は再開された。

事故はあつてはならない。捲き込まれたく

もない。だが、事故は起こる。起こったことを批難、糾弾するのは容易い。事故が起きた後の処し方に、国・組織・人の品格があらわれるように思う。あの時、JRの職員は「ご迷惑をおかけします」と詫びながら毛布と軽食を渡してくれた。客を目的地まで運ぶことを使命としているからか、行き先毎に人数を確認して、バスを手当した。避難誘導、待避所の設営、搬送等徹夜で職責を全うした。彼らの家族も被災しているにちがいない。一方、乗客の方も、取り乱すような態度は見られなかった。新白河駅では公衆電話の前に行列をつくって、短い会話で済ませ、順を送った。

避難所では携帯電話の充電器を持ち寄った。夜が明けたとき、医者と名乗る乗客のひとり

が、お年寄りや身体の弱いひとのために、体操用マットを体育館の中央に集めて敷きましよう、丈夫なひとは壁際に移動しましょうと大声をあげた。雑魚寝していた人たちは、一斉に立ち上がり、整然とさせた。何気ない譲り合い、助け合いがあった。

事故はもとより災害、疫病、飢饉、戦争は身近にある。有るもの、起こるものと想定し、備えておけば「危機」にはならない。取り乱すこともない。有事を想定し、訓練・演習する日ごろの心構え。最善を願いながら最悪に備える。「安きに居りて危うきを思う、思えば則ち備え有り、備え有れば患い無し。」

昨今の様々な出来事に「あの日あの時・二〇一一年三月一日」のことが思い巡った。